

六地蔵遺跡発掘調査現地説明会資料

令和5年(2023年)11月23日(木・祝) / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

遺跡と調査の概要

遺跡の概要 六地蔵遺跡は県南部の栗東市六地蔵地先に所在する遺跡です。野洲川の左岸に位置し、旧野洲川が形成した扇状地の扇頂部に立地しています。遺跡の南側には標高222.9mの日向山があり、西麓には古墳時代後期の日向山古墳が分布し、山頂には戦国時代の山城(多喜山城遺跡)が築かれていたことが知られています。また、遺跡の北側には近世の東海道(古代東海道をほぼ踏襲)が通過しており、現在でも街道に沿って建つ家並みが東西に連なっています。

調査の概要 このたび、埋蔵文化財包蔵地である六地蔵遺跡の範囲内において、滋賀県大津南部農業農村振興事務所が実施する六地蔵地区ほ場整備工事が計画されました。そのため、公益財団法人滋賀県文化財保護協会が調査主体となって、工事によって影響を受ける範囲を対象とした発掘調査に令和4年度から着手しました。今年度は7162.56㎡を調査対象としており、現在も調査を継続中です。

既往の調査 令和4年度は遺跡の範囲を南北に通る県道の西側を調査しました。調査の結果、古墳時代後期(約1400年前)の竪穴建物19棟や飛鳥時代～奈良時代(約1300年前)にかけての掘立柱建物などを検出しており、古墳時代後期以降集落が形成されていたことがわかっています。

今回の調査 今年度の調査では、古墳時代の古墳群、古墳時代から室町時代にかけての溝などの遺構を確認しました。また、これらの遺構に伴って土器や石製品などの遺物が出土しています。これらのうち、古墳については、いままですの存在が全く知られていなかったものです。今回は、この古墳を中心に説明します。



図1 六地蔵遺跡の範囲(赤枠)と今回の調査地点(★)ならびに周辺の関連遺跡・古道

見つかった古墳群

古墳の概要 今回検出した古墳7基は、すべて墳丘の裾をめぐる周溝のみを確認したものです。土を盛り上げて築造した墳丘や、亡くなった人を納めた埋葬施設は、後世の開発により失われていました。

1号墳 今回検出した古墳のうちで唯一平面形が円形をなす円墳です。墳丘の規模は直径22.0mで、墳丘をとりまく周溝は幅5.0m・深さ0.5mでした。周溝内から土師器の破片が出土しましたが、細片のため詳細な時期は不明です。

2号墳～7号墳 残りの6基は、いずれも平面形が方形の方墳でした。このうち、6号墳はもっとも規模が大きな古墳です。墳丘規模は一辺15.8mで、墳丘をとりまく周溝は幅は5.0m・深さ0.6mでした。周溝内に堆積した土層のうちの上層からは埴輪(円筒埴輪)の破片が出土しました。失われた墳丘上には、埴輪が配置されていたと考えられます。

このほかの古墳は、墳丘の規模が一辺7.6～11.2m、周溝は幅1.0～2.0m、深さは0.35～0.7mを測ります。6号墳に比べて、墳丘や周溝は規模の小さいものです。

古墳の年代は、6号墳は後期初頭(6世紀初頭)、3号墳は前期後半(4世紀末頃)と考えられます。

表1 見つかった古墳の一覧

遺構名	墳形	墳丘規模	周溝幅	周溝深さ	備考
1号墳	円墳	直径22.0m	5.0m	0.5m	
2号墳	方墳	一辺7.6m	1.0m	0.35m	
3号墳	方墳	一辺8.8m以上	1.8m	0.45m	前期
4号墳	方墳	一辺8.8m	1.5m	0.5m	
5号墳	方墳	一辺11.2m	1.8m	0.7m	
6号墳	方墳	一辺15.8m	5.0m	0.6m	後期初頭
7号墳	方墳	一辺10.6m	2.0m	0.4m	

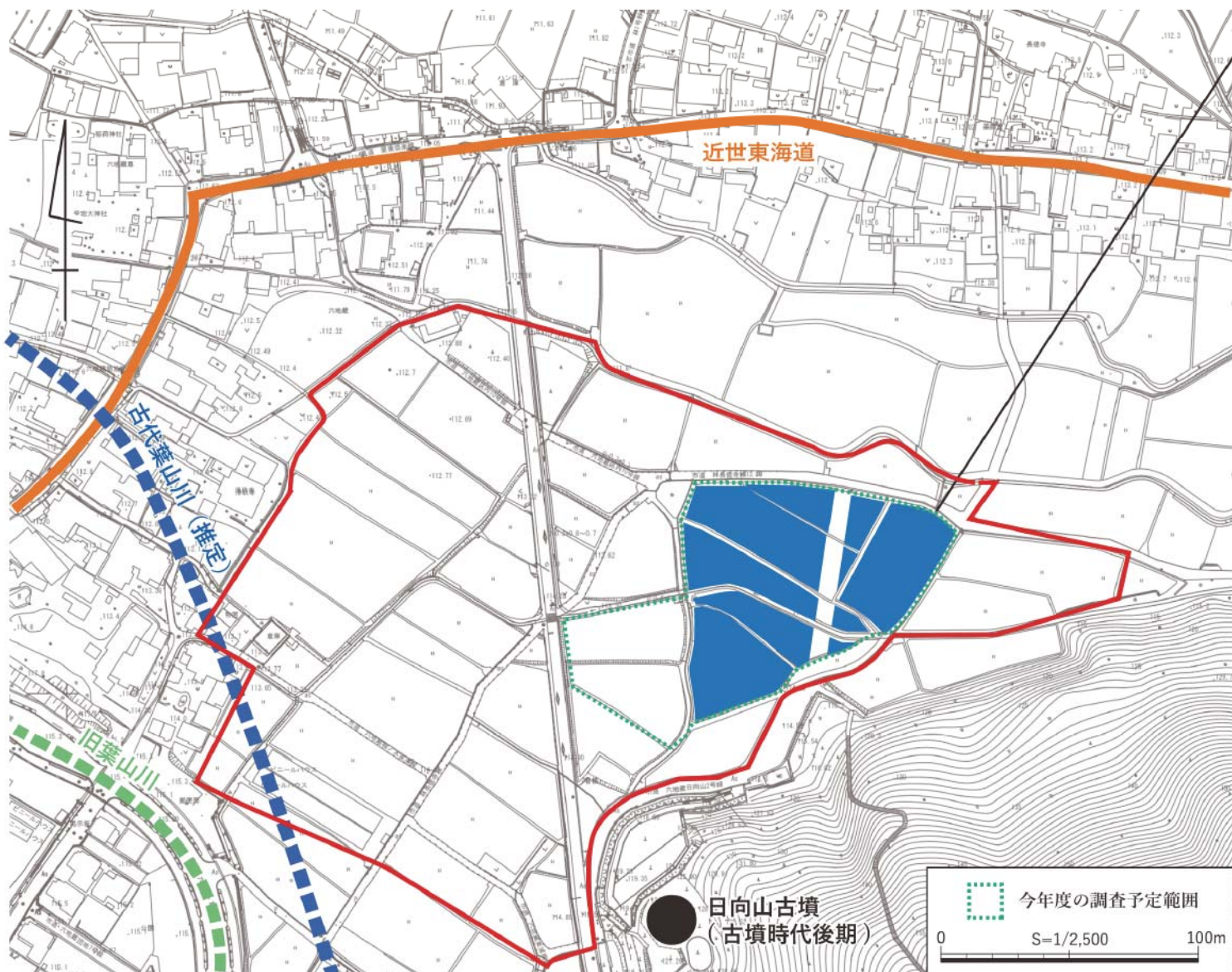


図2 六地蔵遺跡の範囲(赤枠)と古墳が見つかった調査区(青塗)

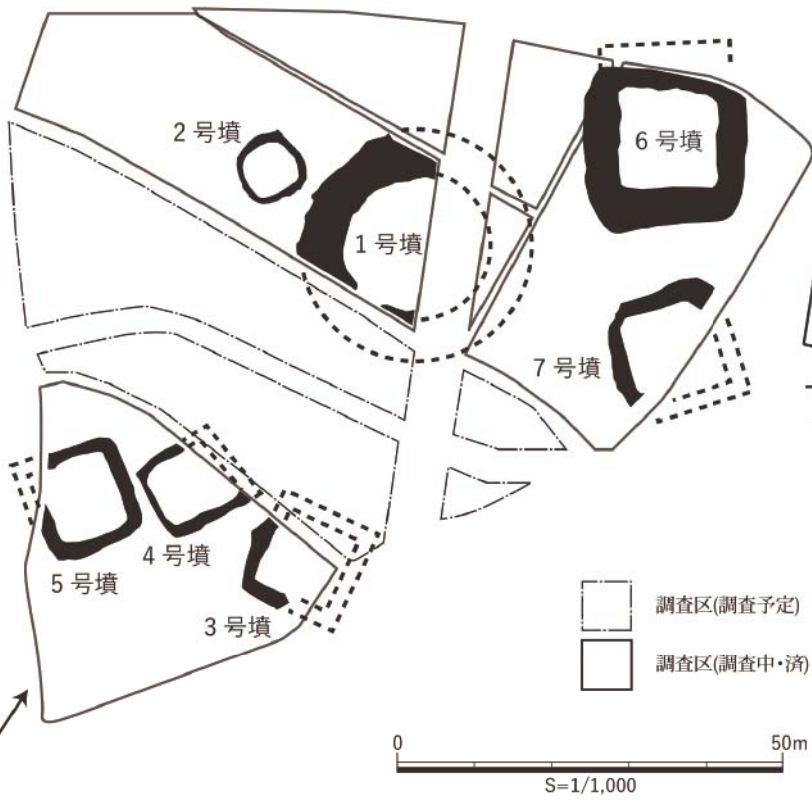


図3 見つかった古墳の分布



写真1 7号墳



写真2 調査地周辺の様子



写真3 1号墳・2号墳



写真4 3号墳・4号墳



写真5 5号墳

出土した遺物

6号墳の周溝南東隅付近の溝底からは、須恵器(杯身)や土師器(高杯)がまとまって出土しました。これらの土器の特徴から、後期初頭(6世紀初頭頃)の古墳であると考えられます。

また、3号墳の周溝からは土器(土師器・甕)が出土しており、その特徴から、前期後半(4世紀末頃)の古墳であるとわかりました



写真1 6号墳から出土した土器・埴輪

(左上:須恵器杯身、左下:土師器高杯・右:円筒埴輪)

まとめ

・今回あらたに見つかった古墳群は古墳時代前期後半から後期初頭にかけて築られました。この古墳群から西へ2.5kmの位置にある安養寺^{あんようじ}一帯には、同時期の古墳群が見つっています(安養寺古墳群)。この古墳群には大塚越古墳(前方後円墳:墳長75m)、帆立貝形前方後円墳である椿山古墳(墳長99m)・狐塚3号墳(墳長32m)といった、野洲川左岸でも有力な古墳が含まれます。墳形や規模などからみて、今回見つかった古墳群は安養寺の古墳を築いたような集落を束ねた首長ではなく、個々の集落の有力者が築いた古墳と考えられます。

・古墳群を検出した六地藏遺跡は、おおむね「東浦」という名の小字の範囲に含まれます。この小字の中には、古墳に関連した字名とみられる「塚越」と称する場所があったことが知られていました。今回の調査によって、地域に残された地名の由来となる古墳が明らかになったと考えています。

・今回見つかった古墳群は、遺跡の西側を流れる葉山川が平地へ流れ出た付近に位置します。古墳群がある葉山川右岸には日向山西麓^{にっこうやま}に古墳時代後期(6世紀)の日向山古墳群があり、左岸側の小丘陵には大正2年(1913)に銅鏡2枚が出土した古墳時代前期(4世紀)の岡山古墳や時期不明の古墳が見つかった堂山古墳群があります。今回の発見で、古墳時代を通じて付近一帯が墓域として利用されていたとわかりました。

・野洲川左岸には高野遺跡、岩畑遺跡、林遺跡などで古墳時代の集落が確認されています。このうち、この古墳群を築いた人々の集落は、葉山川の下流に位置する集落遺跡である高野遺跡を想定できます。ちなみに、現在は名神高速道路に沿いに西流する葉山川は近代に付け替えられたもので、以前は県道六地藏草津線にあたる場所を流れており、東海道に沿いに西流していました。さらに、地形の細かな分析からは、本来は日向山の西麓から平地へと流出したのち高野遺跡が位置する北西の方向へと流れていたと推定しています。この高野遺跡はJR草津線から国道8号付近にかけての広域にひろがる遺跡です。国道1号周辺で行われた既往の調査で古墳時代前期の竪穴建物が多数見つかっており、周辺には同時期の古墳も確認されています。また、今回と同じくほ場整備に伴い平成31年度から実施された調査では、古墳時代前期・後期の竪穴建物が確認され、JR草津線南側にも古墳時代の集落域が及んでいたことが分かっています。今回見つかった古墳群は、同じ葉山川の流域に立地するこれらの集落の居住者によって築かれた可能性が高いと考えます。

・今回の発見により、葉山川を軸として集落と墓域が分布する古墳時代の景観が明らかになりました。